OPINION

中部経済新聞

ナビゲーター

日本への期待
世界各地から

99

見習うべき教訓と規範

カザフスタンから（下）

【ディナラ・イェッセン、リーム中産連】

今回の日本訪問は、愛知県の太田商店「らんパーク」から始まり、まず同社の長い歴史と独自のブランド鶏の開発について学んだ。カザフスタンには現在、地鶏・ブランド鶏の市場はないので、これは新たな発展への挑戦となる。

顧客がレストランを訪れ、具体的に味や食感の違いを試し評価すれば、地鶏・ブランド鶏の優位性を広報してくれることになる。

また香川ランチでは、日本で古くから栄養源として鶏卵と鶏肉とを食べてきた歴史の一端に触れることができた。ヤマショウフーズからは、日本には親鳥と若鶏の区分があり、その両者がともに好まれる現状を聞くことができた。

トヨタ自動車現役社員による農業分野へのTPS（トヨタ生産方式）の展開に関する講義では、生産性と品質向上のための重要なコンセプトである工程の自働化について、素晴らしく、新しい観点を理解することができた。カザフでもすでに一部の生産ラインで「自働化」の導入を試みているが、この講座は新たな可能性を提供してくれた。TPSの豊富な経験を持ち、現在農業分野で実践している専門家から講義を受けられたことは、名誉で貴重な機会であった。

日本食鳥協会の専務理事からは、日本の鶏肉事業の全体像、統計について知ることができた。国産と輸入肉の比率、地鶏とブロイラーの消費量、そして鶏肉産業の成長戦略などについて興味深い内容だった。われわれは、これまで考えてもみなかった自社製品の輸出可能性について熱心に議論した。

貯蔵設備用センサーと、それを生産工程に組み込み、飼料タンクへ飼料切れなしで連続補給するYEデジタル社の方式は、カザフのアレル・アグロ社のような規模の企業にとって必須で、供給と物流チェーンの改善を探索するのに役立つ。

このように多くの企業と交流する機会を持てたことは素晴らしいことだった。上記はほんの一端にすぎないが、この訪問・視察旅行では、実際の作業を見学し質問し、カザフの鶏肉会社ではまだ使われていない多数の有用な技術を学ぶことができた。

視察後、得られた成果や結論についてグループで話し合い、大きな学びがあった。訪日前、日本企業は最新の設備、多額の投資、革新的な技術を持ち、卓越した品質で優れた業務を遂行していると参加者の多くは予想していた。しかし日を追うごとに、ロボットやナノテクノロジーではなく、非の打ちどころのない自己規律と、顧客の期待にたえず注目することが、それを可能としていることに気づき始めた。このような文化的習慣が、日本企業の仕事と製品のあらゆる側面をゆっくりではあるものの、必然的に向上させていることに。

これこそ、私たちが見習うべき最も重要な教訓であり規範であると誰もが同意した。生産システムのルールをきびしく尊重しながら、最終顧客のためにそれを改善する方法をたえず模索することは、進歩と卓越への二つのエンジンである。今回のユニークな訪問が、カザフスタンの鶏肉産業全体に新たな展開をもたらし、より高い水準を導くものと確信する。

（月曜日に掲載）